

## 梅棹忠夫の『文明の生態史観』－壮大な学説か、それとも大雑把なスケッチか

### 文明の生態史観

私は梅棹忠夫の『モゴール族探検記』や『知的生産の技術』の愛読者であり、学生時代には新しいアイデアを京大式カードに記録しては保存していたほどである。また、大学院時代は京都大学の動物生態研究室に在籍しており、梅棹は研究室の大先輩であり、あこがれの存在だった。

『文明の生態史観序説』は1957年に「中央公論」に掲載された梅棹忠夫の文明論であるが、梅棹自身は「序説」として書いたものではなく、「序説」という言葉は編集者によって付けられたものであるらしい。おそらく、この論文は次に続く体系的な学説の序論にあたる、と編集者は考えたのであろうが、「本編」にあたるものは、「もうすこし体系的なものがかかぬばならないとおもっている」と中公文庫の解説に梅棹自身が書いたにもかかわらず、発表されることはなかった。中公文庫に収録された論文は、本のタイトルと同じく『文明の生態史観』であり、この本は大ベストセラーになり、梅棹の代表作となった。この論考では、以後統一して『文明の生態史観』として言及する。

『文明の生態史観』を要約してみよう。梅棹は旧世界を大きく第一地域と第二地域に分け、第一地域はその東西の端である日本と西ヨーロッパの数国であり、その他の諸国は第二地域に該当すると考えた。第一地域では、高度の近代文明が発達しているが、第二地域ではまだ発達していない。ここで言う文明とは、巨大な工業力、交通通信網、行政組織、教育の普及、豊富な物資、高い生活水準、高い平均年齢と低い死亡率、発達した学問と芸術を指し、一言で表現すれば「よい暮らし」ができることである。

第一地域では封建制が発達し、その後革命を経て資本主義が成熟していったが、日本とヨーロッパの発達とはほぼ独立に、並行的に進んだと考える。一方、第二地域では、専制帝国ができては破壊と征服を繰り返し、高度な文明を発展させることができなかつた。さらに、近世に入ると、第二地域の遊牧的暴力は鎮圧され、中国、ロシア、インド、トルコといった四大帝国が成立したが、これらは第一地域からの侵略にさらされることになった。結局、第二地域では、封建体制も資本主義も発達せず、専制国家や植民地支配があっただけだと言う。

ここで梅棹は生態学における植物群落のサクセション（遷移）理論が文明の発展にも適用できるのではないかと考えた。生態学におけるサクセションとは、ある立地で時間の経過とともに植物の構成種が入れ替わることであり、その原因として気候、土壌、光をめぐる種間競争などが重要である。現在では、植物だけでなく動物も含めた生物群集が変化することもサクセションと言う場合があるが、その変化は理論的に予測可能である。

梅棹は生物のサクセションと同様に、文明は一定の条件のもとでは一定の法則にしたがって進行すると考えた。第一地域は中緯度温帯に属し、適度の雨量と高い生産力に恵まれていた。また、地理的条件によって、第二地域からの暴力に蹂躪されることなく、サクセッ

ションが順序よく進行したと考察した。

## 『文明の生態史観』への評価

植物群落のサクセションは、十分な時間があり大きな攪乱がなければ、最終的に「極相」と呼ばれる安定相に到達するが、極相は気候や土壌によって同じではない。同様に、文明の発展も単系的に一つの方向に向かうのではないと梅棹は主張したが、この見方は単系的なマルクス史観と正反対のものであった。

若い時に、『文明の生態史観』を読んだ際、それはマルクス史観とは異なって文明の多系主義を唱えた点、その発展に生態学における遷移をイメージした点に強く惹かれた覚えがある。日本と西ヨーロッパが大陸の両端に別れて交流が乏しかったにもかかわらず、中央アジアで発生した強大な暴力の影響を受けずに、高度な近代文明を発達させたという主張はまったく正しいと思っていたし、この点こそが多くの日本人に歓迎された理由であろう。

一方で、『文明の生態史観』については、さまざまな批判や検討が加えられてきた。そのすべてに目を通したわけではないが、マルクス史観の破綻は今日の世界を見れば明らかなので、ここでは触れないことにする。

川勝平太の『文明の海洋史観』は、梅棹の見方に海洋からの発展が抜けていることを指摘している。梅棹の理論では、日本の近代文明は恵まれた環境の中で自発的に進んだこととなるが、実際には海洋を通した貿易が重要であったと考えられる。アメリカ大陸やアフリカ大陸を概観しても、環境が安定していさえすれば、高度な文明が発達するわけではないことは明らかである。

村上泰亮は『文明の多系史観』において、梅棹が言う文明の遷移において、生物種にあたるものがどのような社会集団であり、どのようなメカニズムで発展していくのかが明らかでないとして批判している。また、梅棹理論では、一見多系的な文明の発展が、古典的帝国—封建制—近代社会という単系的な一方向の経路として描かれ、その成功例が日本とヨーロッパであり、挫折例がその他のアジア諸国であるとみなしたが、その説明が十分ではないと述べている。この点について、生態学の視点からもう少し考えてみたい。

## 生態遷移

植物は種によって、光、水分、栄養分、気温などの環境への耐性や、新しく生じた裸地への侵入速度が異なり、不適な環境では死滅する。火山や山火事、干ばつなどによって植物が死滅した環境では、その環境下で生育できる種が侵入するが、環境が安定していれば、徐々に環境は改善され、植物種間の競争が強くなり、競争に勝ち残った種が優占するようになる。植物が替わると、群落内の環境も変わっていく。そしてその場所の環境の中で、これ以上変わらなくなった植物群落を極相に達したと考える。

たとえば、草原の中に強い光の中で成長するマツやコナラなどの陽樹が侵入すると、それらは成長しつつ土壌を豊かにして、それまで優占していたススキなどの多年生草本にとって代わる。陽樹が成長すると、しだいに森林内の光量が減っていき、少ない光量下でも成長できるブナやカシなどの陰樹が増えていく。陰樹の森では、陽樹の芽生えは成長できないので、陰樹が極相林として続くことになる。ただし、近年の植物生態学では、群落がすべて極相に変わるとは考えず、大なり小なり攪乱が生じることによって、さまざまな植物の多様性が生まれることが重視されており、「極相」という概念は否定されたとみならず研究者もいる。

動物群集の遷移は、環境と植物の両方の影響に加えて、すでに住み付いている動物に依存する。植物が光合成によって一次的に生産しなければ、動物はエネルギーをえることはできず、強力な捕食者や競争者がいれば定着することはできない。ただし、動物は移動できるので、不適な環境を避けて新しい生息地を探ることができる。

人間は動物の一種であるから、その文明のサクセッションを考えるのであれば、気候による影響、植物による影響、他の動物による影響、そして他の人間による影響を分析しなければならない。しかし、そのような分析は『文明の生態史観』でも、現在に至るいかなる論考でも行われておらず、この点をもって梅棹の説明が不十分であると批判するのは適当ではないように思われる。

## 文明の遷移

日本とヨーロッパは温帯の恵まれた気候下で発展したけれども、亜熱帯や熱帯の方が快適であり、生産性が高いという見方もできる。実際、生物群集は気温が高く雨量が多いほど豊富である。また、最古の文明として知られるエジプト、メソポタミヤ、マヤ・インカは熱帯や亜熱帯で発達した。

一方、日本やヨーロッパのような温帯では、冬を乗り切るために燃料が必要である。石油や石炭を十分に利用することができなかった時代には、燃料として重要なのは植物だった。そのために、人口が増えた江戸時代後期以降、日本では多くの地域で山から木が消えて、その生産性が低下したことが指摘されている。植物は燃料、建材、食物そして人間以外の動物に

数々の文明は発展するにしたがって、その周辺の森林を利用しつつ、その結果生じる乾燥化や環境破壊とともに衰退した。したがって、文明の発達には豊かな植物やそれを支える水が必要であるが、この条件を満たすのは温帯だけではない。

文明の遷移においては、植物のサクセッションのように、生物種が入れ替わり、その結果として植物群落の形状や性質が入れ替わるのではなく、政治体制や生産関係、文化や技術が変わるのだと推察される。それは、人々がよりよい暮らしをするようになることであり、国として豊かな経済力をもって繁栄することである。このような発展は、他国による侵略を受けないかぎり、国内の資源の有効利用や技術の進展によって自発的に進むと思われるが、日

本の場合、金、銀などの鉱物を利用した貿易や他国の文化・技術の吸収が大きな役割を果たしたことはまちがいない。同様のことは、中東諸国による原油の利用にもあてはまるであろう。植物や動物の場合、種子の飛来を含めて他の地域からの移入の役割は、サクセッションの初期ほど大きく、サクセッションが進行するほど小さくなる。一方、文明のサクセッションにおいては、情報の伝播速度や大きさは日増しに増大しており、国境が意味をなさなくなっている。

植物群落はしばしば環境の攪乱によって初期化される。それは、大隕石の衝突や火山の爆発のような大規模なものから、人間による森林の伐採、河川における増水、森林における大木の枯死のような小規模なものまでさまざまである。梅棹は、中央アジアにおいてしばしば発生する強大な権力が周辺の国々を破壊することを強調する。具体的にはオスマン帝国やモンゴル帝国の侵略を指しており、それによってアジアの国々は文明の遷移を順調に進めることができなかつたとする。一方、日本とヨーロッパは大陸の両端に位置することから、侵略に大きく影響されずに健全に発展することができたことになる。

生物の世界でも、優占種が劣位の種を滅ぼすことは普通であるが、劣位の種が生き残る条件としては、自然環境が変わること、自然の攪乱が起こること、優占種を襲う捕食者や寄生虫が出現することなどが挙げられている。しかし、環境が安定していれば、いずれ時間が経てば優占種は劣位種を駆逐すると考えられる。中央アジアの強大な権力が日本に及ばなかつたのは、その権力が別の理由で崩壊したからであろう。

暴力的な侵略は、世界のさまざまな地域で起こっている。アジアの人々は、東アジアへの侵略から太平洋戦争を引き起こした日本人は攻撃的だと考えるであろうし、ヨーロッパにおいても、ローマ帝国や十字軍、ナチスなどによって暴力的な侵略が行われている。また、ヨーロッパの国々は競争するように、アジア、アフリカ、南アメリカの国々を侵略していった。力を持った時に他を侵略して莫大な利益を得ようとするのは、人間の本性ではなかろうか。

生物の遷移では、環境の安定にともなう生物群集が豊富になることが大半ではあるけれども、退行することもある。高層湿原に浮かぶミズゴケ群落には時間の経過にともなうさまざな植物が侵入し、やがて樹木が育って成長する。その結果、浮島全体が重くなったり、季節的に浮島が冠水すると、ミズゴケの島は浮くことができずに沈下し、そこで成長した植物の一部もしくは全体は枯死することになる。

同じように、文明が他国による侵入を受けずに自滅することは普通であり、森林、鉱物、石油や水の枯渇による衰退は先に述べた通りである。ミズゴケ群落と対比させれば、一定以上巨大化した文明は、食料その他の資源の枯渇によって沈むことになるのかもしれない。このほか、文明の繁栄や衰退には、民族間の対立や政治体制など、人間相互の関係が影響すると考えられるが、この点について論じる能力は私にはない。いずれにしても、文明の繁栄や衰退については、いつの時代にも予測ができるような理論が必要であると考えられる。

## 文明は予測できるのか

梅棹の『文明の生態史観』は、マルクスの唯物史観と同様に、文明の予測には役立たない。なぜならば、ある時代のある地域におけるスケッチにすぎないからだ。そこでは、多くの識者が指摘するように、アメリカについての言及はない。中国は人口、経済力、軍事力において日本を凌駕しつつあり、研究開発や人材への多大な投資は、その差を広げる一方であろう。アメリカや中国の発展は、封建制を経なくても高度な文明が発達することを証明しており、この一点だけをとっても、梅棹の主張は否定されることになる。今や、古くからヨーロッパの中心として隆盛を誇ったイタリアやギリシャの凋落ははなはだしく、ヨーロッパ全体を合わせてもアメリカにかなわない。

この点について厳しく批判した論考もある。橋爪大三郎は、『文明の生態史観』を「いかにも高度成長期にさしかかる日本人が考えそうな、日本人による日本人のための議論だった」とし、日本の近代化が進んだのは「生態的な理由でなく、宗教的な理由だったのではないか」と主張している。そして、『文明の生態史観』は旧大陸と新大陸の関係について、あえて目をつぶった「夢想の世界秩序」だと断じている。

興味深いことに、梅棹は『文明の生態史観』において描いた日本の優位を、「極相」すなわち最終段階としてとらえていたわけではない。日本がいずれ社会主義国にならないとも言えないとも書いており、さらにバブルとその後の日本について「もう日本は終わった」とすら言っている。

梅棹が生態学を学んだ頃、生物は種の繁栄のために生きると考えられていた。梅棹の師匠である今西錦司の進化論やすみわけ論においても、同じ種の個体は進化において変わるべき時にはすべて同じ方向に変わらなければならないとし、生物群集においては他を侵すことなく、相補的にすみわけることが強調されていた。今西のすみわけ論では、生物が競争することすら否定されていたが、現代の生態学者で今西を支持する者はいない。この点については、別の論考でくわしく検討してみたい。

その後の生態学では、生物の個体はそれぞれの利益、それぞれの遺伝的特性を増やすべく生きるという社会生物学的世界観に強く影響を受けるようになった。社会生物学では、ネオ・ダーウィニズムに基いて、生物はそれぞれ適応的に振舞うことが強調されたが、実際の環境や外敵、競争者は場所や時間によって変動するものであり、生物がしばしばまちがった行動を選択してしまうことも現在では広くみとめられている。

このような見方から考えると、文明にしても社会にしても、ただ人々がよいくらしを求めて発展するようなものではなくて、競争を通して少しでも他人を出し抜こうとする結果として変化していくと考えた方が正しい。この点から見直せば、政治権力が少数の人間に集中する帝国や社会主義国も、グローバル企業のトップに恐るべき富が集中する資本主義国も同じである。

自己の利益の追求は、文化や技術の発展をもたらす一方で、文明や社会の衰退を招くこと

もある。保全生態学で言及されることが多い「共有地の悲劇」は、共有地を利用して少しでも自分の利益を高めようと皆が企てる結果、共有地の環境や生産力が破壊され、誰もが大きな損失を被ることを指している。浮島の植物群落の崩壊も「共有地の悲劇」の一種であるとみなされる。地球環境も「共有地の悲劇」になりかけているのかもしれない。

また、生態学で発展した「現在の利益」対「将来の利益」という概念は、両者がトレード・オフの関係にあり、「現在の利益」ばかり追い求めると、「将来の利益」が失われることを意味する。都市の周囲の森林や鉱物の度を過ぎた利用が文明の衰退を招いたのも、「現在の利益」ばかり追い続けた結果である。

梅棹が政府の委員や政権への助言によって政治的にも活躍した高度成長時代の日本は、「現在の利益」が「将来の利益」につながると安易に考えすぎていた。赤字国債を増やし続け、少子化に何の有効な対策もとらなかった。ダム、橋、道路などのインフラを急速に整備しすぎたために、やがてそれらが一挙に老朽化して使い物にならなくなる。その影響はすでに表れており、現在では国の基盤となる研究機関の人員や研究費は大幅に削減され、工業技術において他国に比べて優位な分野も減少し続けている。大学の研究者も、大学生自体が減ることにより、今後減少する一方であろう。IT や AI などの未来への技術についても中国やアメリカに後れを取り、原子力発電や石炭火力を続けたり輸出しようとしたりするなど、環境政策については世界中から非難されている。

このような指摘は今や世界中の識者によって主張されている。とりわけ、世界の知性と言われているジャック・アタリは『21世紀の歴史』の日本語版 序文で、日本の政策を痛烈に批判し、その将来について案じている。なぜこんなことになったのかと言えば、日本の政治家やそのアドバイザーたちが、その目先の利益ばかり追い続け、未来の世代のことを考えなかったからである。今や、日本が自慢できるのは、安全な町と長生きできる環境であるが、それもいつまで続くのかわからない。その責任は社会や政権への影響力が大きかった梅棹にもある。もっとも、アタリのフランスにしても、その他のヨーロッパやアメリカにしても、貧富の差が大きく、町にはゴミが溢れ、何かあると暴動が起り、コロナに対してもまともに対応できていない。日本あるいは日本人が誇るべき点は多い。

おそらく、これからの文明の予測に際しては、文明を構成する単位あるいは要素に着目する必要がある。具体的には、経済力、軍事力、政治体制、資源量、人口、技術力、知的財産、個人の能力や幸福度などが、その単位として挙げられる。これらの間にはトレード・オフになっているものもあり、それをどのように選択していくかに、文明の今後はかかっていると考えられる。経済力や軍事力が劣っていても、国民一人一人が幸せであればよい、という考え方も成り立ち、地球環境に負荷を与えないことが高い評価を受けることになるかもしれない。現在のアメリカや中国は経済力、軍事力、人口においては秀でていますが、社会内の矛盾や対立は大きく、いつまでも繁栄しているかはわからない。

『文明の生態史観』では、今後の問題がいくつも提案されている。地域におけるパーソナリティ、経済をめぐる競争、社会主義の行方、官僚制とその克服、共同体内の集中と分散な

ど、いずれも重要であり、やはり梅棹には先見の明があることを印象づけられる。しかし、『文明の生態史観』を発展させた文明論が展開されることはなかった。梅棹の師匠である今西錦司が生きていれば、こう言うだろう。「梅棹は国立民族学博物館の館長となり、日本の民族学の発展には大きく寄与したけれども、私のような体系的な著作を残すことはできなかった。ベストセラーを連発することや学会に寄与することによって、出版関係者や学会関係者に高く評価されすぎたのであろう。そのような環境が類まれな才能の持ち主であった梅棹忠夫の発展を阻害したのだと考えると残念だ。」これに対して梅棹も黙っていない。「今西先生は確かに進化論やすみわけ論について体系的な著作を残したけれども、種内の多様性を無視した論理は破綻しており、現代の生物学者にはまったく評価されていない。私は日本の未来についていくつかの予言を行い、見事に的中しているだけ、あなたよりマシである。」

## 引用文献

橋爪大三郎 (2011) 文明の生態史観と戦後日本. KAWADE 夢ムック 文藝別冊 梅棹忠夫一地球時代の知の巨人 (河出書房新社) 144-149

梅棹忠夫 (1974) 『文明の生態史観』 中公文庫

川勝平太 (1997) 『文明の海洋史観』 中公叢書

鈴木孝弘 (2014) 『新しい環境科学』 改訂2版。駿河台出版社

村上泰亮 (1998) 『文明の多型史観』 中公叢書

『文明の生態史観』は生態学をモデルとして構想されたにもかかわらず、この点について生態学者が言及したものは見当たらない。梅棹が同時代のきわめて優れた生態学者である森下正明や吉良竜男と深い交友関係にあったことを考えると、この点は不思議である。植物のサクセッションについての考え方も、近年変わってきており、あらためてサクセッションが文明のモデルとなりうるか検討することには、意味があるだろう。